

月夜（つきよ）に光（ひか）る丸木舟（まるきぶね）

（西袋・柳之宮）

あっしがこどものころ、じい様（さま）に聞（き）いた話（はなし）だが……。

西袋（にしぶくろ）の蓮華寺（れんげじ）のわきの田（た）んぼは、まん月（げつ）の晩（ばん）にかぎって、ピカッ、ピカッと光（ひか）ったそうなの。

何（なん）でも、そのように光（ひか）るところには、丸木舟（まるきぶね）がうまっているそうなの。

丸木舟（まるきぶね）がうまっている田（た）の付近（ふきん）は畑（はたけ）であった。その土（つち）をレンガ工場（こうじょう）に売（う）って田（た）にした。

あっしが若（わか）いじぶんだったな。丸木舟（まるきぶね）がでたというので見（み）にいった。でっけい舟（ふね）であった。ボッカヒキの人たちは、どろをぬきすぎたと言（い）って、この舟（ふね）をあわてて、うめなおした。

どうしてか、わかんねーが、柳之宮（やなぎのみや）から馬場（ばんば）にかけて、流木（りゅうぼく）がたくさんうまっている。その丸木舟（まるきぶね）も流（なが）れついたものだと思（おも）う。

中川低地には、丸木舟埋没伝承が多く聞かれるが、その実、丸木舟ではなく流木や倒木が多い。また、丸木舟の埋没地が光るという伝説がある、新田（草加市）や早稲田（三郷市）、新方（越谷市）等で聞かれる。月夜の晩に水田が光る所に丸木舟が埋没しているとの伝承地は、その木を除去することを忌む場所が多く、崇りを恐れて掘り出してはいけないとされる。八潮市域で流木が多く埋没する所は、柳之宮、西袋、上・中馬場地域等である。昭和四十五年ごろに八潮町郷土研究会が丸木舟があるという伝承から発掘した埋没の木は、流木ではなく松の倒木であった。

たから船（ぶね）のちんぼつ

（大原・浮塚・南川崎）

むかーし、むかし、八潮（やしお）は海（うみ）だった。

うんだから、6メートルもほれば、カキガラいっぺーでるんさ。なんでもそのじぶん、おかといえ、安行（あんぎょう）と国府台（こうのだい）ぐれーのもんだった。

この海（うみ）をば、峰（みね）の八幡様（はちまんさま）から金銀（きんぎん）のおたからをつんだ船（ぶね）が国府台（こうのだい）にむかった。

その日（ひ）にかぎって、風向（かざむ）きのあんべーいが、よっぽどわるかったんだなー。

ちょうど、八潮（やしお）ふきんとおりにかかったところで、しけのために船（ぶね）はずんでしまったそう。

大原（だいばら）の三角山（さんかくやま）や浮塚（うきづか）の氷川様（ひかわさま）、南川崎（みなみかわさき）の八反野（はったんの）などは、船（ぶね）がはずんで小高（こたか）いおかになったところだそう。

何（なん）でもそこをほれば、おたからがでるといわれるが、どんなもんかねー。

採話は、中川低地が奥東京湾と呼ばれた浅い海のころの伝承である。中川低地からの出土遺物に、縄文晩期や前野町式土器などが表採されることから、約二千年前ごろには、既に海退していたものと思われる。八潮地方では、船埋没伝承地が多い。市域の浮塚や南川崎、大原等の伝承は、峰（川口市）と国府台（市川市）を連絡していた船が沈没した地といわれる。八潮地方の船沈没伝承地は、水口祭祀や稲荷祭祀場等となっており、豊作祈願をし恵みをうけることが宝船に転じたものと思われる。

私（わたし）が子供（こども）のころ、じい様（さま）に聞（き）いた話（はなし）だが……。

昔（むかし）、若狭国（わかさのくに）小浜（おばま）に八百比丘尼（やおびくに）が住（す）んでいたそう。昔（むかし）は、武蔵国（むさしのくに）は峰（みね）の八幡様（はちまんさま）より下総国（しもうさのくに）国府台（こうのだい）までが海（うみ）で、この辺（あた）り一帯（いったい）はどろ水（みず）であったという。

上総国（かずさのくに）から行商（ぎょうしょう）で、このどろ水（みず）のところへ魚（さかな）を売（う）りに来（き）ていたじい様（さま）がいた。峰（みね）の人（ひと）たちは、このじい様（さま）から魚（さかな）をたくさん買（か）ったそう。

ある日（ひ）、魚売（さかなうり）のじい様（さま）が、「長（なが）い間世話（あいだせわ）になったので、皆様（みなさま）を上総（かずさ）の私（わたし）の家（うち）へ招待（しょうたい）し、ごちそうしたい。」との申（もうし）でをしたそう。そこで「一度（いちど）いってみんべー。」ということから、名主（なぬし）と村人（むらびと）五、六人が出（で）かけたそう。行商人（ぎょうしょうにん）に教（おし）えられた家（うち）につくと、行商人（ぎょうしょうにん）の家（うち）は網元（あみもと）で、大層（たいそう）な暮（く）らしをしていた長者（ちょうじゃ）であった。何（なん）でもじい様（さま）の小（こ）づかいかせぎに行商（ぎょうしょう）をしていたとのこと。村人（むらびと）たちは、たんまげてしまった。

「遠（とお）いところからよく来（き）んなさった。」

「めずらしいごちそうをするからまー、あがれ。」

ということで、奥座敷（おくざしき）にとおされた。

この家（いえ）のことだからたいそうな料理（りょうり）がでるだろうと、内心（ないしん）期待（きたい）していたが、なかなか料理（りょうり）がでない。一人（ひとり）が廁（かわや）の帰（かえ）りに料理場（りょうりば）をのぞくと、まないたの上（うえ）に人（ひと）の首（くび）がのっている。もどってその話（はなし）を聞（き）いた村人（むらびと）は、「人魚（にんぎょ）をくわされてはさー大変（たいへん）。」とおおさわぎ。

そこへ、「めずらしい魚（さかな）を食（たべ）させようと思（おも）い、手間（てま）がかかりました。」と、さしみや酒（さけ）が出（だ）された。だが、誰（だれ）もさしみに手（て）を出（だ）さず、酒（さけ）などがかっくったそう。長者（ちょうじゃ）の家（うち）では旅（たび）の疲（つか）れで手（て）がでないのだろうと、さしみを土産（みやげ）にもたせてくれた。お礼（れい）をいって、帰（かえ）りの船（ふね）の中（なか）で村人（むらびと）は、人魚（にんぎょ）のさしみを海（うみ）に投（な）げすてたが、名主（なぬし）のじい様（さま）だけは酒（さけ）をかっくらすぎて、ふところにいれっぱなしで、家（うち）に帰（かえ）ったそう。

名主（なぬし）のじい様（さま）の孫娘（まごむすめ）の二人（ふたり）が、「おみやげちょうだい。」といってじい様（さま）のふところのさしみを取（と）りだし、くっちまったそ

うな。誰（だれ）ともいうことなく村人（むらびと）のうわさになり、その娘（むすめ）は器量（きりょう）が良（よ）くても、人魚（にんぎょ）をくった娘（むすめ）ということから嫁（よめ）にいけず、年（とし）をとっても娘（むすめ）のままであったそう。とうとう尼（あま）さんになり、若狭国（わかさのくに）に流（なが）れつき、何（なん）でも若狭（わかさ）で八百年（はっぴゃくねん）も長生（ながい）きしたそう。

中馬場（なかばんば）の山王塚（さんのうづか）に「比丘尼（びくに）」石（いし）があるが、八百比丘尼（やおびくに）を供養（くよう）したものだそう。

長寿伝説の一つに八百比丘尼伝承がある。市域の伝承は、中馬場の昼間元次郎氏からの採話である。八潮市域に伝えられる八百比丘尼は、峰（川口市）の名主の娘が人魚を食べたため容色が衰えず、若狭で八百年も長生きしたといわれる。中馬場山王塚の比丘尼石は、その八百比丘尼の供養碑であると伝える。峰付近には八百比丘尼伝承が多く、峰の八幡神社の大銀杏や貝塚（川口市）の船つなぎ松等は、八百比丘尼の植えた木といわれる、また、鳩ヶ谷宿（鳩ヶ谷市）の石橋のたもとは、八百比丘尼が住んでいたとか、八百比丘尼は貝塚の出身で、貝塚は八尾比丘尼が食した貝の山であるといわれる。八潮地方の八百比丘尼伝承は、峰を中心とした語りが流布したものである。

むかし、なんでも源義家（みなもとのよしいえ）が東国（とうごく）に征伐（せいばつ）にいったとき、合戦（かつせん）で難儀（なんぎ）したそうなの。

義家（よしいえ）の弟（おとうと）に源義光（みなもとのよしみつ）がおって、兄（あにじゃ）の応援（おうえん）に向（むか）うとちゅう大曾根（おおそね）をとおりかかった。義光（よしみつ）はちょうど綾瀬川（あやせがわ）のところで道（みち）にまよったんだと。

そこで休（やす）んでいたところ、北（きた）から南（みなみ）に流（なが）れていた川（かわ）の水（みず）が、急（きゅう）に南（みなみ）から北（きた）へ流（なが）れをかえたそうなの。

川（かわ）がいきさきをおしえてくれたというので、その方向（ほうこう）へ出陣（しゅつじん）し、兄（あに）の義家（よしいえ）をたすけ、大勝利（だいしょうり）をおさめたんだと。

戦（いくさ）からの帰（かえ）り道（みち）、出陣（しゅつじん）の方向（ほうこう）をおしえてくれたところにたちより、橋（はし）をかけたそうなの。その橋（はし）が蛇橋（へびばし）だそうなの。

八幡太郎義家の伝説は、関東から東北地方にかけて広く分布する。八潮地方では足立区内の寺院に源頼義と義家・義光らの父子伝承が多い。花畑（足立区）大鷲神社は、義家の弟、源氏の新羅三郎義光が勧請したと言われる。市域で八幡神社が祭祀されるのは八條・木曾根・大曾根・南後谷・西袋・柳之宮などで、そのうち、八幡太郎義家伝承をもつのは大曾根だけである。大曾根八幡神社の伝承も花畑大鷲神社と同様に、弟義光が兄義家の助成に出向くおり大曾根付近で出陣の方向を見失い、綾瀬川の流れをみて行先を判断したと伝える。この説話は後三年の役（1083－87）を物語る。

古池（ふるいけ）と新池（しんいけ）

（大瀬）

私（わたし）が子供（こども）のころに、じい様（さま）から聞（き）いた話（はなし）だが……。

大瀬（おおぜ）付近（ふきん）にアヤジャというべっぴんな娘（むすめ）っこが住（す）んでおった。アヤジャには、トネジャという仲（なか）のよい男（おとこ）がいた。

ときどき二人（ふたり）は川（かわ）を下（くだ）り、海（うみ）へ出（で）かけていたそう。それは、人（ひと）がうらやむほどのいい仲（なか）であったそう。

それをよからぬと思（おも）っていた下総（しもうさ）台地（だいち）沿（ぞ）いに住（す）んでおったフトジャは、アヤジャを自分（じぶん）の妻（つま）にしようと、ちょっかいをかけたそう。

松戸（まつど）付近（ふきん）から大瀬（おおぜ）のトネジャのところへ来（き）て、アヤジャを横取（よこどり）しようとした。トネジャは、アヤジャを盗（とら）れては大変（たいへん）と、争（あらそ）ったんだと。

しょせん体（からだ）のでっけいフトジャが勝（か）ち、いやがるアヤジャを連（つ）れ、松戸（まつど）へ引（ひ）き上（あ）げた。

トネジャは、アヤジャをうばわれた悲（かな）しみで土中（どちゅう）深（ふか）くもぐり込（こ）んでしまったんだとよ。

そのうわさを耳（みみ）にしたアヤジャは、いたたまれず、フトジャの目（め）をかすめ、トネジャがもぐり込（こ）んだ池（いけ）に来（き）て、アヤジャも土中（どちゅう）深（ふか）くもぐり込（こ）んだんだと。

その穴（あな）も深（ふか）い穴（あな）になったんだと。

村人（むらびと）たちは、アヤジャが二度（にど）とフトジャに連（つ）れていられないように池（いけ）の周（まわ）りに菖蒲（しょうぶ）を植（う）えて供養（くよう）したそう。そしてトネジャの池（いけ）を「古池（ふるいけ）」と名付（なづ）け、アヤジャの池（いけ）を「新池（しんいけ）」と呼（よ）んだんだそう。それから後（あと）も、たびたびアヤジャを求（もと）めてフトジャが来（き）たが、池（いけ）に菖蒲（しょうぶ）が植（う）えられているので近寄（ちかよ）ることができなかつたんだとよ。

古池（ふるいけ）と新池（しんいけ）は、それはひやっこくきれいな水（みず）がわき、大瀬（おおぜ）の村人（むらびと）の飲（の）み水（みず）になったんだと。村人（むらびと）たちは、毎日（まいにち）、この古池（ふるいけ）と新池（しんいけ）の水（みず）をくみに来（き）て、アヤジャとトネジャの話（はなし）をしあい、水（みず）の恵（めぐ）みに感謝（かんしゃ）をしていたんだと。

いつとはなく、村人（むらびと）の口（くち）からその話題（わだい）が消（き）えると、古池（ふるいけ）と新池（しんいけ）の水（みず）がにごりだしたんだとき。それから大瀬（おおぜ）付近（ふきん）では、赤（あか）ちゃけた井戸水（いどみず）を飲（の）むようになったんだとよ。

よくじい様（さま）が話（はなし）をしていたっけなー。水（みず）の恵（めぐ）みに感謝（かんしゃ）しねーと、家（いえ）の井戸水（いどみず）が赤（あか）ちゃけるとよ。

川を蛇にたとえた民話が多い。八潮地方には綾瀬川と利根川（中川）、太日川（江戸川）と呼ばれた大河が流れていた。綾瀬川は、八潮市大瀬付近で利根川（中川）と合流し、江戸湾へ流れていたが、鎌倉時代のころその主流が、下総台地沿いに流れる太日川（江戸川）に合流し、南流したことがあったと推定される。その流路跡が古川（小合溜井）と呼称された。江戸時代の中ごろに古利根川は、ほぼ現流路に定まった。大瀬には古池と新池と呼ぶ池沼があった。その池は、川の決壊によりできたもので、菖蒲が繁茂し真水を貯えていたという。本民話は、川の流れの変遷と大瀬の古池・新池伝承を合作した。綾瀬川をアヤジャ（綾蛇）、利根川をトネジャ（利根蛇）、太日川をフトジャ（太蛇）にたとえた。蛇にたとえたのは綾をなし流れた綾瀬川と、中川が「中川の七曲りの臍曲り」と呼ばれるほど蛇行が多く、蛇を連想したためである。古池は「戌の切所」と呼ばれ、決壊年は不明である。新池は「申のき所」と呼ばれ、宝永元申年（1704）の中川堤の決壊によりできた池であった。